

水木しげる氏

表紙絵

＝みんなで歌おうゲゲゲのゲ＝

表紙絵：水木しげる

- | | | |
|-------------------------|-------|-----|
| ・ 特集：国領分館開館50周年 | | 2～3 |
| ・ 図書館をもっと楽しもう！分館のイベント紹介 | | 4～7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | | 8 |

祝

国領分館開館50周年



・調布市立図書館の分館について

現在、調布市内には図書館が11館あり、人口2万人に1館、半径800mに1館、2つの小学校区に1館という原則で建てられています。

市内で初めて開館した分館は、1969年に開館した国領分館です。その後、1982年に10館目の分館となる佐須分館が開館するまで、約1年に1館というペースで分館が開館していきました。これにより、ほぼ現在の図書館網が完成しました。

そして、分館網構築の先駆けとなった国領分館が、今年の8月14日に開館50周年を迎えました。

・国領分館開館当日の状況

開館日には一般書394冊、児童書2,166冊の計2,560冊（現在の所蔵冊数は約5万冊）しか所蔵していませんでした。

空いている本棚を使って、「図書館3年のあゆみ」展などを行ったという記録が残っています。

開館初日の入館者は153人、貸出冊数は104冊でした。



1974年の外観 当時はまだ入り口左側にあるおはなし室がありませんでした。

当時の図書館報などを見ると、住民の方に本の整理を手伝ってもらったり、図書の寄贈を受けるなど、様々な方の力を借りて、図書館の運営をしていた様子がわかります。



地下化される前の京王線と国領分館
(1970年)



1987年の子ども室

・国領分館開館50周年記念事業

今夏、国領分館では開館50周年を記念し、「こくりょうぶんかん50さいおめでとうビンゴ」実施しました。

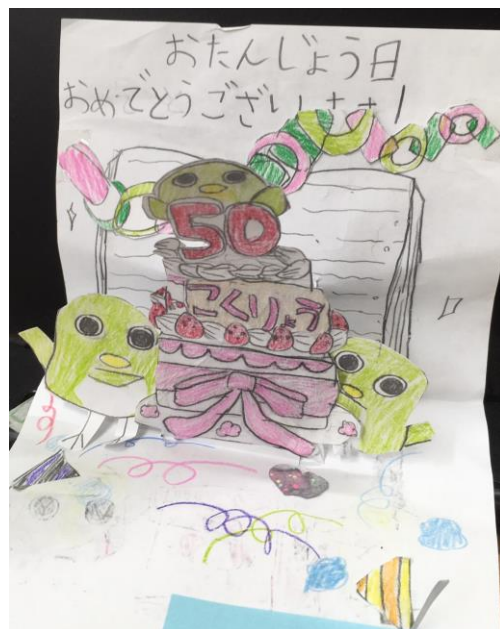
ビンゴを目指すには、様々な本を読まなくてはならず、「いつもは読まない本も読まないかね。」と話している親子や、効率よくビンゴを目指すそうと、本棚や館内の地図を一生懸命に見ている子がいました。

8月14日の誕生日には、じろの絵（左ページ参照）を参考にして作ったメッセージカードをもらいました。

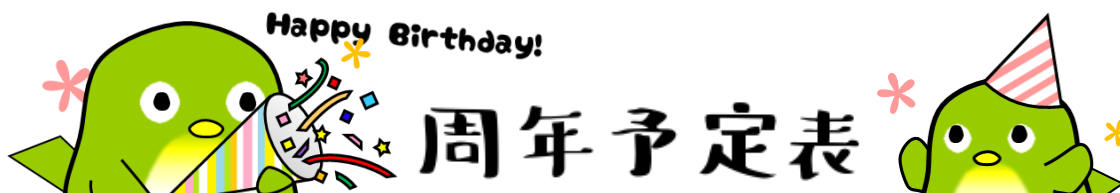
今後、50周年を迎える分館が続いていきます。



ビンゴのスタンプを押す子たち



お祝いのメッセージカード



2020年	調和分館(旧つつじヶ丘分館)50周年 染地分館40周年
2021年	旧深大寺分館50周年、新深大寺分館10周年 神代分館50周年
2022年	宮の下分館50周年 佐須分館40周年
2024年	緑ヶ丘分館50周年 富士見分館50周年
2025年	調布市立図書館60周年 若葉分館50周年



図書館をもっと楽しもう！ 分館のイベント紹介

図書館では、本と人を繋げる活動の一環として、様々な企画を開催しています。
今回は、各分館で開催されたおもしろい企画についてご紹介します。
どの企画も、各館職員の工夫とアイデアがたくさん込められており必見です！
（※ 読書マラソン【深大寺分館】と読書ノート【佐須分館】以外のイベントは、
現在は終了しています。）

えほんクイズ



深大寺分館や染地分館が行った企画です。

「このほんよんで！第二版」に載っている
えほんに関するクイズにチャレンジ！
子どもたちは、保護者や友達といっしょに
クイズを楽しんでいました。
知っているえほんを読み直したり、知らな
かった絵本に出会うきっかけになったりし
たようです。

じろさがし



宮の下分館、富士見分館、若葉分館で
行った企画です。

「じろさがし」の最初の企画館である
宮の下分館では、子どものお楽しみ
として恒例の企画となっています。
若葉分館は、すべてのじろを見つけると
「えほんみくじ」の入った、手作りの
ガチャガチャマシーンを引けるよう
にしました。どの館でも大好評で、中には何
度も挑戦する子の姿も見られました。



本まぐろを釣り上げよう！



読書マラソン

深大寺分館では読書パスポートをお配りしています。

読んだ冊数分のマス目を塗って東日本、西日本、世界を旅しよう！

塗ったマス目の数に応じて読書通帳などの賞品をプレゼントしています。

2020年3月31日まで開催予定です。



読書パスポートは、赤と青の2色。



どこまで飛んでいけるかな？

深大寺分館で行った企画です。

図書館の中でマグロ釣り！？

釣ったマグロには本のヒントが書かれています。釣ったマグロはカウンターで本と交換することができます。



読書リレー



深大寺分館で行った企画です。

図書館の利用カードの末尾の番号ごとにチームに分かれ、本を借りるごとにシールを貼り、チームごとの貸出冊数を競うイベントです。

1位は末尾が0番のオレンジチームでした！

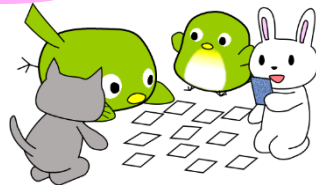


かるた大会



若葉分館で行った企画です。

調布のご当地かるた「調布かるた」を使ってみんなでかるたを楽しみました。当日は小学生と幼児で2グループに分けるほどの大盛況。みんな、頭と頭をつき合わせて真剣な顔で読み上げられた札を探していました。



ブッククエスト



深大寺分館で行った企画です。

さらわれたこじろを救うため、じろが冒険の旅に出発！問題を解いて、アイテムを手に入れながら、冒険を進めよう。手に入れたアイテムは「冒険の書」のじろに装備できるようになっています。全問解けた人には豆本をプレゼントしました。

このほんよんで！の木



宮の下分館で行った企画です。

「このほんよんで！」の本の展示に合わせて開催されました。飾られた木のモニュメントに、展示の本を借りた子どもたちが、葉っぱなどを貼って木を完成させる企画です。

葉っぱがいっぱい。
とってもきれいな木になりました！





おみくじ企画



調和分館や深大寺分館、染地分館で行った企画です。

調和分館はその日のラッキーカラーとおすすめの本が書かれた「色みくじ」。本も一緒に展示しました。
深大寺分館はカウンター横に段ボールで神社を作った、本格的なおみくじです。
おみくじに、様々なテーマの本を4冊ずつ掲載し、紹介しました。
染地分館では、手作りのガチャガチャマシンを使い、出てきた運勢に合わせて多様なジャンルの本を紹介しました。

ガチャガチャマシンは、どこでも大人気！！
みんなワクワクしながら、つまみを回していました。

スペシャルクイズ



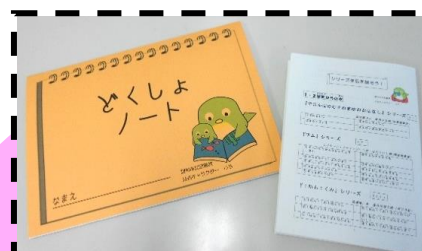
染地分館で行った企画です。

大好評のえほんクイズがパワーアップ！
リスト「夏休みにすすめる本2019」掲載図書から、1・2年生、3・4年生、5・6年生のグレード別に4冊ずつ三択クイズを作りました。
読み物やノンフィクションも加わって、難しくなった問題です。

子どもたちは解けたでしょうか？



どくしょノート



佐須分館では特製のどくしょノートを、先着200名に配布しています。

表紙のデザインは全部で4種類あります。
かわいいじろの表紙のノートを使って、自分だけの読書の記録をつぶりましょう。

配布期間は2019年11月30日までの予定です。

図書館では、これからも、利用される方に楽しんでいただけるようなイベントや展示を企画していきます。ぜひ来館し、お楽しみください。

家や村の祭りと休日

関 口 宣 明のぶ あき

1. 村人の休日と楽しみ

農業を中心としていた頃の村の暮らしでは、田植えや作物の収穫に追われ、自給自足の生活を支えるためにも忙しい日々を送っていました。しかしその合間には、正月、節句、盆や村祭りなどの休日があり、村人はこのような日を楽しみにしていました。村の祭りなどは、神様を人間の世界に迎えて、酒や米で飲食をともにし、その恵みを願うもので、春は豊作祈願、秋は収穫の感謝のために行なわれます。佐須地区の農業神である稲荷神社では、「初午」(2月最初の午の日)の祭りに、当番の家々がウルチ米で団子



を1,000個ほどもこしらえ、かつてはやぐらの檣の上から参拝客に撒いたそうです。

また、柴崎稲荷神社の春cap.初午の団子作り祭りでは、「大喰講」といって、一人一人が五合の酒を飲み、二杯で五合飯になるようにお椀にご飯を盛り上げたたかもりめし高盛飯を食べ競う行事がありました。ふだんは中々食べられない貴重な米のご飯は最高のごちそうでした。

家々で祝う桃の節句や端午の節句でも、ひしもち菱餅や柏餅などをたくさん作り、贈答品にしたり、共に食したりすることが、村人のきずな絆を深めると考えられました。明治大正期の調布では、地域により多少の違いはありますが、年間の休日が50日ほど、また、ボタモチ、五目飯、団子、ソバといった「かわり物(ごちそう)」を作って、神に供え、家族でその味を楽しむ日が年間70日ほどありました。

2. 祭りと娯楽

ちんじゅ鎮守(村の神社)の秋祭りのときにも、村中が一斉に休んで祭りに参加するのが慣わしでした。ふだんは仲間とともに働き、休日は仲間とともに楽しんだというわけです。祭りは

は娯楽の少なかった時代の農村にとって、様々な文化や芸能が取り入れられる機会ともなりました。江戸から明治にかけて、若者達が担い手となって、祭り囃子、獅子舞、相撲など娯楽性の強いもので祭りを盛り上げるようになります。明治11(1878)年には、上石原村と飛田給村の「若者中」が世話人となって、両国から力士を招いて大相撲が催されました。この時の番付表には、大関を筆頭に、大勢の力士の名が書かれています。祭りの奉納芸である「祭り囃子」は、明治時代に、青年達が、近隣の世田谷などから師匠を招いて習い覚え、各地区でにぎやかに演奏されるようになりました。また、下石原では、10月初めの八幡神社祭礼に市内で一ヶ所だけ「三匹獅子舞」が奉納されています。この獅子舞は元禄年間(1688~1703)のころに始められたといわれ、三匹の獅子がくりひろげる喜怒哀楽を表現したぶとう舞踏は見物客をひきつけ、演技のなかでは、田植えのしぐさも見られました。

今日、人々の暮らしは様々となり、休養のための休日は増え、農業に由来する祭り日は減りつつあります。鎮守の祭りも土、日曜に行うところが多くなりましたが、祭りでつちかわれた文化や芸能は、現在も市内各地で受け継がれており、調布の庶民史の一コマを語る貴重な遺産といえるでしょう。

※参考文献：『調布市史民俗編』

刊行物番号

2019-111

図書館だより 第253号

令和元年 9月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<https://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>